

ほのぼの

第59号

令和3年

11月

発行

信行寺門信徒会

神戸市須磨区戎町1-2-3

TEL.078-732-5209



お浄土では老いることはない

住職

信行寺の庭に菩提樹の木があります。この木はヒツパラ樹という名称でしたが、お釈迦様がこの木の下で悟りを開かれたという故事にちなんで、その後、菩提樹と呼ばれるようになったそうです。この木は、秋になると葉が落ちてしまう落葉樹です。暑い夏の間は葉が青々としげって日陰をつくります。夏が終わり秋の気配を感じるようになりますと、葉が落ちはじめて散ってしまふので、散り終わるまでは掃除してもきりがありません。いつまでこれが続くのかとも思いながらも、暑い夏の間はご苦労さんでしたという気持ちもわいてきます。

これに老年期であるわが身の姿を見せてもらっているような気がします。古来より人生の老年期は秋にたとえられてきました。白髪が増えたり薄くなったりするからでしょうか。白秋です。老いてきますと、葉が木から離れるように、体力や気力、能力、知力などが

(さよならも言わずに)知らぬ間に私から離れていきます。

仙崖という江戸時代の人の書いた「老人六歌仙」に、「手は振るう 足はよろつく 齒はぬける 耳は聞「こえず 目はうとくなる」

と老いの現実を面白く詠っていますが、笑えぬ事実です。この現実はずも避けられません。

それとともに、老いる時期になると、この世で出会った肉親や友人知人などの別れも頻繁になり、悲しいことです。お浄土に生まれると、老いることも別れの悲しみもありません。

これらのことは老いを寂しく思う面ではありますが、小学校時代は病身であった私が、このように老年期まで生きてこられたことを不思議に思います。しなければならぬ役目があったように思われてなりません。実に有り難い事です。同時に、自分をこの年まで護り育んでくれた人々がいることを思うと嬉しいかぎりです。ことに大震災後、お寺を復興するという大役を勤めることができたことは、総代・門信徒・有縁の皆様などの絶大なご尽力のおかげです。感謝してもしきれません。お念仏の声を伝え続けさせて頂きます。

私たち人間にはプライドがあります。老いても変わりません。自分をよく見せようとしませから、哀れな姿をなるべく見られたくない。名譽と安樂を追うエゴからどうしても離れられません。「その通りです」と笑って受け流せばいいのに、「年寄りだと思って、……」とつい思ってしまう。お念仏で受け流していきましよう。

「裏を見せ 表を見せて 散るもみじ」良寛さんの辞世の句です。裏も表も世間にさらさざるを得ない「いのち」を生きているのです。意識してもしていません。

有難いことに、落葉樹は葉が落ちると、次の葉になる芽が顔を出します。菩提樹の葉も次の葉になる芽が控えている。人の世も同じです。先祖のいのちが受け継がれてゆく。先に生まれた者が主人となり、後から生まれた者が客となる。主人が去れば客が主人になる。信行寺では、この度私が住職を辞し、新住職に長男の釈恵悟、副住職に三男の釈秀爾が就任してお念仏を伝え続けていきます。これからよろしくお願いいたします。





副住職

今回は七高僧の最後、第七番目の法然上人について紹介させていただきます。

岡山県津山市の南に美作・誕生寺というお寺があります。そこにかつては法然上人の生家がありました。一一三三年に地方武士・漆間時国の一人息子として誕生されますが、九歳の時に父・時国が夜討ちによって殺害されるといふ事件がおこりました。その時、父が遺言として「恨みを捨てて出家し、自分の菩提を弔ってほしい」と言ったことが仏門に入る動機となったと伝えられています。叔父の観覚のもとで勉強を六年間されましたが、法然上人の非凡な才能を認められた観覚は本格的に比叡山で仏教を学ぶことを勧め、十五歳のとき比叡山で正式に出家されたのでした。

そして天台宗の修行や学問に励まれた法然上人

は天台の主要な教えである「天台三大部」を三年間で学び終えました。周りからは将来有望な学僧として認められるようになりますが、エリート僧侶としての名利を求めるときをよしとせず、十八歳で比叡山・黒谷の経蔵に籠り、ひたすら一切経を読む読書三昧の生活をおくりました。従来通りの天台宗の教えに満足することなく、仏教の教えがすべて書かれている一切経を五度も読破されたといひます。そして四十三歳のとき「一心に弥陀の名号を専念して」という善導大師の「観経疏」のお言葉に遇われたのです。それが衝撃であったのは、従来の伝統的な教えでは「念仏でもよい」くらいに考えられていたのが「ただ念仏を称えるしかない」といふ教えだったからです。なぜそう言えるのかといえは、「かの仏願に順ずるがゆえに」と説かれているように、それは人間が決めたことではなく、如来様の願われた本願に順ずることになるからなのです。

「専修念仏」の教えに帰された法然上人は、まもなく山を下りて京都の吉水に庵をむすび、貧富・貴賤を問わず多くの人々に法を説かれました。当時、

平安末期の京都では平家の権力が衰えだし、十年後には平家滅亡に追いやられるという激動の時代でした。また、権力争いだけでなく様々な天災地変や疫病によって、多くの人がいのちを落としていった時代でもありました。このような先の見えない不安な時代、法然上人によって説かれた「専らに念仏を称えることで皆平等に阿弥陀さまに救われて行く、お浄土という安養なる世界に生まれ行く」という教えは多くの人の心のよりどころとなっていきました。

そして、世に広く法然上人の名を知らしめたのは、京都大原の勝林院で旧仏教側の諸師方と論戦をされた「大原問答」によってでした。結果は完全に法然上人側の勝利であり、後の天台座主・顕真、東大寺再建の功労者である重源らに認められて専修念仏の教えは年々繁盛していきました。多くの弟子や信徒が吉水に集まるなか、親鸞聖人も二十年間の比叡山での修行の末、導かれるように吉水の法然上人に出逢われたのです。(つづく)

夏期法座

八月十八日、第三十九回になる信行寺夏期特別法座が行われました。今回も昨年続きコロナウイルスの影響を考え、感染対策をして午前中のみの実施としました。「人間の根性(五悪)」について、住職、副住職が法話しました。最後は、副住職の馬頭琴と木下さんのピアノを伴奏に恩徳讃などを歌い、有り難かったです。

短い時間でしたが、今年も参加いただいた方々ありがとうございました。





お寺とビハーラ活動と共に

中川 さなみ

西本願寺にはビハーラ活動があります。「ビハーラ」とは、サンスクリット語で「精舎」「僧院」「心の安らぎ・くつろぎ」「休息の場所」などという意味です。「ビハーラ活動」は人々の苦しみ、悲しみに寄り添いながら、命の尊さに気付かされた人々の集う共同体です。

私にとって「休息の場所」は、法友の方々と出会ったお寺の法話会です。坊守さんの笑顔に救われたことも度々ありました。

「ビハーラ活動養成講座」の認定を受け、「国立ハルセン病療養所 長島愛生園」の真宗会館での報恩講へ参加しました。園の中にある「真宗会館」はハルセン病として強制収容された人々の手によって建設されました。阿弥陀様、親鸞聖人の教えをよりどころとして、苦しみに耐えたとお聞きしました。

毎年秋には、ビハーラ活動の要として「真宗会館」

の清掃活動のお手伝いをし、その後、報恩講法要に参加していました。昨年は、「神戸からコロナの感染を持ち込んだらいけない」との理由付けで、私は悩んで参加を見送りました。後日、自身の身を守るための言い訳に過ぎなかったのでは・・・と自問自答の日々でした。ご住職の法話で「流されている私、流されていないと思いついて私」をお聞きして、コロナに流されている私でした。

昨年、新型コロナウイルスのワクチン接種が始まる前に、患者の方、医療に携わる方々への中傷がありました。

「長島愛生園」開園九十年の新聞社へのインタビューに答えて、入所者の方は「ハルセン病差別の過ちと同じ道だ。」かつて差別されたつらい記憶と重ねて「コロナ感染者への態度も同じ、恐怖から排除しようとするのは人間の弱い心だ。正確な知識をもって正しく行動することが大事である。」と語っておられました。「休息の場所」でのご聴聞は身体の動く限り、常にわが身を顧みて正しい道を聞き分けて生きたいと思っています。

合掌

法語カレンダール

今回は、本願寺出版社の法語カレンダール、十二月の言葉の説明をします



今日きょうである
あること難かたき、
今日である

藤代聡磨先生の言葉です。スペイン風邪に代表される今と同じようなウイルス蔓延による不安、戦争により情報が統制され、本当のことが知らされないというのが当たり前の世の中。そんな時代の中で、仏法に出会い本当のことに気づかされた人の心の底からあふれ出た感動と感謝の声が先の言葉だと考えられます。だからこの言葉は「有り難き今日を大事に生きなさい」という教訓を示すのではなく、そんなことにさえも気づかず日々を無駄に過ごしていた自分に愕然としながらも、気づけたこと、

当たり前が当たり前ではなかったのだと「考え直す縁が整ったこと」に対する喜びの声です。まさに今のコロナ禍にも通じることです。

「これからがこれまでを決める」同じく藤代先生の言葉があります。普通は、「これまでがこれからを決める」と考えるでしょう。

「これから(の生き方)が、これまで(の意味)を決める」と言葉を添えると、味わいやすくなります。つまり、失敗したことも、思い通りにいかなかったこともみんな無駄ではなかった、自分には必要なことだったと「これまで」に意味を見出し、引き受けていくことです。「これから」の生き方次第で、その意味が大きく変わると考えるのです。

苦難や困難、いろいろあったけれど、それらを経験してきたから、ここまで来れた。泣いたり、笑ったり、怒ったりしたことすべてが無駄ではなかったと引き受けていくことが大切です。

日頃の疑問を考えよう

Q 私はよくお寺にお参りして、法話を聞かせていただいています。ある時、知人から「よくお寺にお参りして、徳を積まれてえらいですね。」と言われました。その時は、あやふやな受け答えをしましたが、どのように答えるべきだったのでしょうか？

A お寺にお参りすることは、体力も時間も必要ですから、大変な時もあるでしょう。何気ない言葉ですが、浄土真宗の教えを理解されている方からは、考えさせられる言葉ですね。

徳とは功德のことです。現在または未来に幸せをもたらず善い行為を「徳を積む」といいます。これには人間の徳と仏の徳があります。

一般的には人知れず善い行為をする「人間の徳」を「陰徳」（いんとく）といいます。「あの人は陰徳を積んでいる立派な人だ」と言って褒めたりします。

浄土真宗では、単に善い果報を受けるための良い行為を指すではありません。仏教は「仏に成る教え」ですから、「仏に成ることのできる徳」を指しています。

仏様は「悪いことはやめて、善いことをする生活をしなさい」と教えられています。つまり「徳を積む生活をしなさい」という教えです。しかし、人間は我執から離れられず、仏に成ることの出来る行為はできません。なぜならば、何をしても「私がしたという思い」が付いてまわるからです。これを毒に例えます。人間は毒の雑じった行為しかできません。それで、浄土真宗では、自力（自らの行い・はかり）では徳を積めないと説きます。徳は回向（えこう）していただくもの、つまり仏さまの方から私たちはいただくもの、つまり私たちはあくまで受け手です。

徳は、仏さまのお慈悲の徳です。お寺にお参りすることで、自分が偉くなったり、救われたり、そして徳が積めたりするわけではありません。ましてや、人格者になるとか、いいことが起きるとか、不幸がないとか、思い通りになるとか、そういったことはありません。お念仏のいわれについて仏法聴聞することは、仏さまが私達にそうさせてくれていることであり、私達は徳をいただくばかりなのです。



信行寺行事予定とご案内

◆住職継職法要

十一月二十七日（土）

午後二時より四時まで

式典・お勤め・法話

清興（音楽家ユライによる演奏）



◆報恩講法要

十一月二十八日（日）法話 住職

午後二時より三時半まで

◆新春初法座

令和四年 一月五日（水）午後二時より

お正月をお寺でお迎えしましょう。

ご一緒に年の初めのお勤めをし、その後、法話をご聴聞ください。また、歌と楽器の演奏を楽しみましょう。

今回も、会食は控えることと致します。

編集委員より

「和を以て貴しとなす」 和宗総本山の四天王寺へお参りしてきました。親鸞聖人が尊敬された、また和国の教主といわれた聖徳太子が建立したお寺です。石の鳥居をくぐるとすぐ左に大きな親鸞聖人の御像と「南無阿弥陀仏」の石碑があります。金堂に救世観世音菩薩をお祀りして、それは聖徳太子のお姿だといわれています。この秋より来年の春まで聖徳太子千四百年御聖慶讃大法会が執り行われています。この大法会は各宗派のお勤めもあり、浄土真宗西本願寺の法要が執り行われる日もあります。聖徳太子は、四天王寺を建立する際に「四箇院の制」を設けられました。四箇院とは、「敬田院」「悲田院」「療病院」「施薬院」のことで、それぞれ「寺院」「社会福祉施設」「病院」「薬局」にあたります。聖徳太子は仏の教えを広めるだけでなく、福祉や医療の部門も設置し、衆生の救済を誓願されたということですから。この時代にも疫病があつたといわれていますが、今もまた新型コロナウイルスに翻弄されています。少しでも早くこの病気が終息して穏やかな日常が戻ることを願いながら参拝してきました。娘の卒業式以来、二十年以上に懐かしく敵かな時間を過ごしてきました。

石田 智子